

## 会長再任のご挨拶

会長 長志珠絵

二期目の学会会長を仰せつかることになりました。事務局も交代となり、ご先導いただきつつ、何かしらのお役にたてるよう新たな気持ちで責務を果たしていきたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

また、先月の学会大会では、会場校のみなさまをはじめ、充実した大会を迎えることができました。本学会としては初の筑波大学かつ春日キャンパス、駅から近い→を実現するため、さまざまご苦労いただいたこと、改めまして、深く感謝もうしあげます。

ところで本学会のことをご存知ない、もしくはやや昔風のイメージをお持ちの方にお会いする機会が何度かあり、これもぜひ強調しておきたいですが、この学会は学会員が毎年「微増」という、人文社会科学系ではやはり稀有な存在かと思います。また、2日間のいわば長丁場のなか、昨日、道案内をしてくださっていたロジの院生や関係者の若手が翌日報告しておられる一は、ご本人もお大変かとは思いますが、学会としてとても健全だ—という点も強調しておきたいです。他学会ではなかなかない光景なのではないでしょうか。初日のシンポジウム（非学会員の組み合わせも含め、完成度が高く、知的にも大きな刺激をいただきました）でも若手が登壇者にガンガン質問し、翌日のご自身の報告の宣伝も。加えて、2日目の報告エントリーは若手も退職者も一加えてかつ今回は忙しそうな中堅が結構ご報告。そう。中堅・ベテラン？だって、いまの大学的には「業績」の可視化は必要だし、そもそも校務に忙殺されではない、研究は楽しい→を実感した大会でした。

日本学術会議の状況に端的に現れているように、人文社会科学を取り巻く学的環境は厳しいと言わざるをえません。こうした状況に鑑み、本学会でも今後、実年齢としてではなく「若手」研究者のエンパワーメント事業をさらに検討していく予定です。そういえばたまたまですが、今年の学会賞受賞者3人は全員女性でした。去年も含め留学生の皆さんも受賞も多い。エントリーは毎年2月です。ご指導の院生ODの方々はもちろん、ご本人も含め、ぜひご注目いただければと思います。

## 2024年度大会を終えて

大会実行委員長 中野目徹

11月9日（土）・10日（日）の両日、筑波大学筑波キャンパス春日エリアを会場に、今年度大会を大過なく終えることができました。参加された会員諸姉諸兄に厚く御礼申し上げます。幸い2日間とも天候に恵まれ、私たち準備スタッフをあわせると200名を超える参加者を得ることができました。

2日間で、大会シンポジウム、研究報告35件、パネルセッ

ション3件、思想史の対話研究会のほか、総会、評議会2回、懇親会を皆様のご協力により予定どおり進行することができました。ただし、昨年度も同様でしたが、研究報告では古代0件、中世1件、3分の2が近現代という傾向が今年度も続きました。2日目の会場は5教室に及んだため、聴者が数名という会場も発生してしまいました。

2日目の朝は各会場内が寒いという声も聞かれました。比較的大きな教室を確保したため個別冷暖房システムとなつておらず、多くの皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。大会経費の6割以上を教室借用料として大学に支払いましたのに…。このようなことは、国際卓越研究大学とかを目指すという以前の問題ではないでしょうか。

20年ぶりに大会をお引き受けし、報告要旨集を紙媒体で配付するなど、時代に逆行する側面を感じた方もいらっしゃったかもしれません。しかし、一昨年から再開された対面方式の学会の良さを再確認された方も多いかったのではないでしょうか。来年度以降も、当学会がますます発展的に継続していくことを、心より願っております。

## 2024年度日本思想史学会大会参加記

神戸市外国語大学 松川 雅信

2024年11月9（土）日・10日（日）と、筑波大学筑波キャンパス春日エリアにて開催された2024年度大会に参加した。いわゆるコロナ禍でのオンライン開催を経て、3度目の対面開催となった本年度大会は例年通り、1日目に大会シンポジウム、2日目に研究報告という日程で開催された。

1日目の大会シンポジウムのテーマは「日本思想史学の誕生と展開」であり、「村岡典嗣の国体思想史の遺産」（前田勉氏）、「日本文化史を通じて日本思想史に：日本民俗学も参照しながら」（山口輝臣氏）、「天皇意識」論の地平—井上哲次郎の国体論を糸口に—（杉山亮氏）という3つの報告に加えて、コメンテーター（林淳氏）の発言を拝聴することができた。シンポジウムが主たる対象として掲げていたのは、一般に「日本思想史学の先駆者」と言われることの多い、今年生誕140周年を迎えた村岡典嗣であったが、その村岡を軸としながらも、大正～昭和期の様々な研究者（井上哲次郎・和辻哲郎・西田直二郎・柳田國男）や学問潮流（国史学・文化史学・民俗学）、さらには当該期の文教政策等が相互に関わり合いつつ、「日本思想史学なるもの」が形成されていく歴史的様相を把握することができ、個人的には大変得るところの多いシンポジウムであった。

シンポジウムの場で特に印象的だったのは、（筆者よりもさらに「若い」文字通りの）若手研究者がベテランの報告者に対して、極めて積極的に質問を投げかけていたことである。本学会は、若手を中心に会員が毎年微増傾向にあると仄聞しているが、まさにこうした若手研究者の熱量を印象づけるとともに、こうした若手の関心はいま、近代の学知をめぐる問題に向けられているのだと感じた。過去の日本思想史学の當

みを捉え直すという今次のシンポジウムを通じて、図らずもそうした日本思想史学における現在地の一端を垣間見ることができたようだ。

2日目は、個人報告が35本、パネルセッションが3本で、同時開催された第10回「思想史の対話」研究会と併せて、計5つの会場が用意された。会場の設営・運営は大変なものであったと拝察するが、そのお蔭により盛況を極めたことは間違いない。報告の内容に関して言えば、パネルセッションや

「思想史の対話」研究会も含め、全体の半数以上は近現代に関わるテーマであり、やはり近年の本学会員の関心は近現代に向かっているのだということを改めて実感した。もっとも、前近代を対象として扱う個人報告・パネルセッションの絶対数が少なかったというわけでは決してない。とりわけ今年度大会では、近世儒学思想をテーマとする個人研究報告も目立った。確かに近年、若手を中心として近現代思想が注目的となっているのだろうが、その他の方で前近代の思想史研究も着実に積み上げられていっているのだろう。

ここ数年、大会と同時開催されてきた「思想史の対話」研究会が本年度をもって終了する等、次年度はまた新たな変化が生じることが予想されるが、本年度と同じく盛会となることを期しつつ、擱筆することにしたい。

## 第18回日本思想史学会奨励賞授賞について

### —選考経過と選考理由—

奨励賞選考委員会

### 【第18回日本思想史学会奨励賞受賞作品】

#### 【論文部門】

##### ● 相澤 みのり（佛教大学大学院）

「平田篤胤と薩摩—「天皇のもとつ御国」をめぐる顕と幽—」（『日本思想史学』第55号、2023年）

##### ● 常瀬琳（筑波大学）

「「理」と「風俗」の間—徳川末期における中村正直の思想展開—」（『日本思想史学』第55号、2023年）

#### 【書籍部門】

##### ● 向 静静（立命館大学）

『医学と儒学—近世東アジアの医の交流—』（人文書院、2023年）

#### 【選考経過】

第18回日本思想史学会奨励賞は、例年どおり、ニュースレターおよびホームページを通じて公募した。それに学会誌『日本思想史学』第55号掲載の投稿論文で奨励賞の資格を満たしたものとし（選考規程第5条）、それらを【論文部門】と【書籍部門】とに分けて選考を行った。

選考委員全員で慎重に審査を行った結果、全会一致で、上記の作品への授賞が決定した。

#### ● 「平田篤胤と薩摩—「天皇のもとつ御国」をめぐる顕と幽—」 選考理由

近年、篤胤研究が活況を呈している。こうした中で、本論

文は、篤胤が「天皇のもとつ御国」と述べる薩摩との繋がりに着目し、政治史的側面である「顕」とコスモロジー的側面である「幽」との統合を試みる。「顕」の面では、対外的な危機感や外国事物への関心を背景にして、篤胤が、薩摩藩の要人、とりわけ小納戸頭取の吉井七太夫と懇意にしていた事実を明らかにしている。そして「幽」の面では、天孫降臨神話に関わる霧島の神仙について、篤胤の求めに応じて八田知紀が書いた『霧島山幽郷真語』を取り上げ、篤胤の玄学研究の痕跡を指摘する。こうした篤胤の「幽」は近代の神道政策に連なる性質を持ちつつも、そこから逸脱する方向性も内包していると指摘している。本論文は「近世神話」と評される篤胤のコスモロジー研究に、政治史的動向を取り入れて新たな境地を切り開こうとする意欲的な作品であり、授賞に値する作品であると言えよう。

#### ● 「「理」と「風俗」の間—徳川末期における中村正直の思想展開—」選考理由

中村正直に関しては、西洋近代文明の受容史、また儒教の普遍性と近代の対話などの観点から、従来すぐれた研究が著されてきたが、本論文は、特にその留学までの前期の思想をとりあげて新機軸をうちだした一篇である。幕末の時代状況の文脈をふまえつつ、これまでの研究で捨象してきた、西洋近代と接触した時に中村が感じた動搖、危機感、不安などをくみとり、その思想の変化や形成過程を解明した。

本論文によると、当初「理直」の理想主義的政治観を信じていた中村は、アロー戦争の現実から衝撃を受け、「理」よりも富国強兵よりもむしろ「風俗」の差異に着目し、西洋のその探求に向かう。懷疑して一旦「理」から離れたことで、西洋の富強の背景に優れた「風俗」が存在することを虚心に理解でき、その上で新たな「理」にたどり着くというわけである。一人の「英主」による「教化」に期待するのではなく、「衆人の智力」の向上を説くようになる。そのような論旨は、幕末維新の思想史のための発展的な論点を含み、また今日の異文化理解への含意もある。授賞に値する作品であると言えよう。

#### ● 『医学と儒学—近世東アジアの医の交流—』選考理由

近世日本の古方派医学系医家の評価は、漢代後期『傷寒論』の受容史に、他方、医学思想史の文脈からも西洋自然科学及び近代医学との距離がはかられ、「復古」思想として限定的にとらえられてきた。これに対し本書は、丹念なテキスト分析を通じて近世日本の医学思想・本草学思想を近世儒学思想史の文脈に位置付けるとともに、医家と儒学者との明代・清代中国につながる人的知的ネットワークと系譜に踏み込み、東アジア医学思想史・交流史研究の可能性を示した。他、麻疹や痘瘡など、医家が実際の治療現場から『傷寒論』テキストに取り組みその思想形成をはかるなど社会史的な手法を取り入れて行論を進めた点、「卷末付録 関連略年表」や文中の中国書引用書目や典拠古典文献一覧、『傷寒論』に関わる明清からの渡来書目目録なども高く評価できよう。近世儒学思想史研究に医学思想史という新たな発展をもたらす研究として本

作は授賞に値する作品である。

### 受賞に際しての所感

(佛教大学大学院) 相澤 みのり

このたびは拙稿「平田篤胤と薩摩—「天皇のもとつ御国」をめぐる顕と幽—」を第18回日本思想史学会奨励賞(論文部門)にご選出いただき、大変光栄に存じます。お忙しいなか選考の労をとってくださいました先生方をはじめ、諸事ご調整くださいました関係者各位に心より御礼申し上げます。

拙稿は、平田篤胤が薩摩を称えて詠った歌にある「天皇(すめらぎ)のもとつ御国」をキーワードに、近世後期における篤胤と薩摩の関係を、政治的・世俗的側面である「顕」と不可視の世界である「幽」の両面から検討したものです。これまでの平田国学研究あまり触れられることのなかった篤胤と薩摩の人脈に目を向けるとともに、島津家領内にある霧島山に注目し、篤胤が没入した玄学・神仙・幽界研究と併せて考察しました。このあと、幕末維新から近代へと向かうなかで平田家と薩摩の関係は一層深まり、「顕」「幽」もさまざまなかたちで立ち現れてくることになります。「顕幽無敵」という言葉を遺した篤胤ですが、その根底にあるのは「顕か幽か」ではなく「顕と幽」が常に共にあるとの認識です。引き続き平田国学の多様な展開を検討するうえでも、この視角を十分に意識しながら取り組んでいきたいと考えています。

大学院では斎藤英喜先生にご指導いただいてまいりました。その斎藤先生は本年9月4日にご病気のため逝去されました。奨励賞受賞のご報告をした際はご入院中でしたが、大変に喜んでくださり病室からわざわざメールをくださいました。ご自身の退院も目前でしたので、快気祝いと合同でお祝いの会をしようと、日程まで決めてくださっていたことが昨日のことのように思い出されます。残念ながらその会は実現しませんでしたが、斎藤先生の生前に受賞のご報告ができたことは何にも代えがたいご恩返しとなりました。あらためまして、このたびご選出いただいたことに深く感謝いたしますとともに、ここまで育ててくださった斎藤先生に心よりお札を申し上げたいと思います。

まだまだ勉強しなくてはならないことばかりというなかで、幾分心もとない状況となりましたが、この受賞を励みに頑張ってまいりたいと思います。どうか今後ともご指導のほどよろしくお願ひ申し上げます。

### 受賞の所感

(筑波大学) 常瀬琳

この度は拙稿「『理』と『風俗』の間—徳川末期における中村正直の思想展開—」に対して日本思想史学会奨励賞をいただき、本当に光栄に存じます。これまでご指導、ご助言いただいた先生方、研究仲間の皆様、審査の労をとてくださった先生方に深く感謝申し上げます。

私の論文は、明治期の洋学者としても名高い中村正直の徳川末期における思想展開に注目して、儒学者としての中村が、西洋という他者に目を向けて、その文明を真摯に研究し始め

るに至る経緯を検討したものです。もともと儒者として「理」あるいは「道」の普遍的な妥当性を篤く信じていた中村は、アロー戦争の衝撃などにより「天道」の顛覆を経験した後、日本および西洋という他者の「風俗」に着目するようになりました。この過程において中村は、かつて「天下の公法」だと考えていた基準の絶対性に疑問を抱き始め、自国にとっての「公」は、外部から見るとただの「私」にすぎないかもしれないという認識に至ると同時に、視線を統治者から一国の風俗を構成する一人一人の民衆へと向けるようになりました。

実は、このような中村正直の思想展開を跡付けながら論文を書く過程で、日本留学後の自分自身の経験を重ね合わせることが全くなかったといえば嘘になります。修士課程で中国哲学を勉強した後、日本に留学してからのこの八年間、私も自明だと思っていた常識が覆るような経験を度々したからです。

自己懷疑は必ずしも心地よいものではありませんが、一度自分の信じていた「道理」から離れてはじめて、自らの有限性を認識し、他者をありのまま見て、新たな「道理」を模索することが可能になります。これは、中村正直についての研究を通じて私が学んだことでもあります。

今回の受賞を励みとして、今後はさらに視野を拡大しながら研究を深化させられるよう、精進してまいりたいと思います。皆様からのご指導やご助言を賜りますよう、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

### 受賞に際しての所感

(立命館大学) 向 静静

このたび、拙著『医学と儒学—近世東アジアの医の交流』(人文書院、2023年)に第18回日本思想史学会奨励賞を賜り、誠に光栄に存じます。審査にあたっていただいた先生方、ご推薦いただいた辻本雅史先生、本著のもととなった博士論文の指導教員の桂島宣弘先生、そして本書の刊行にご尽力くださった人文書院の青木拓哉様に、心より感謝申し上げます。

本書では、近世日本において「復古」を掲げた古方派医学について、従来行われてきた近代科学を参照軸とする進歩史観的な評価、あるいは古方派=『傷寒論』への「復古」に局限するような概括的見解を双方から解放し、総体的に「復古」が持った意味を位置づける試みを行ってきました。具体的に古方派医家の「復古」の具体的な内容、古方派医家と古学派儒者との間の人的ネットワーク、疾病的流行、また医学の「復古」と同時代の東アジアの学術思潮などについて検討しました。以上の検討を通して、古方派医学の再定位を試みました。また、儒者たちが医学に対しても関心を持ち、医家たちの「復古」事業を支持し、かつ積極的にそれに参加していたことを明らかにしました。すなわち、近世日本の医学「復古」運動は、儒者と医家との間の深い人的ネットワークのなかで展開されたのです。

医学史や医学思想に関わる史料は難解で、研究を始めた最初の2年間は、どれだけ史料を読んでも理解できず、非常に

悩んでいました。研究が行き詰った時、私はよく、研究対象である医家の墓参りに行きました。お墓の前で、時空を超えて研究対象の医家たちと対話しようと何度も試みました。彼らは単なる研究対象にとどまらず、私にとって大切な「仲間」でもあります。彼らから学んだことは多く、これは思想史研究の魅力の一つだと感じています。

拙著が出版されてから、先生や先輩方からメールや励ましの言葉、手紙や葉書をいただき、大変励まされてきました。今回の受賞を大きな励みとし、今後も一層精進してまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

## 第19回日本思想史学会奨励賞募集要領 (2024年12月1日, 日本思想史学会)

- 1 2023年1月1日から2024年12月31日までの間に、日本思想史学会の会員によって公刊された著書・論文類（応募は1点に限ります。掲載誌の都合で分載されたものは1点として数えます）を対象とします。審査の対象とする業績は単著に限ります。
  - 2 上記の日本思想史学会の会員は、応募する業績が公刊された時点で、学部卒業後の専門的な研究歴が20年未満の者に限ります。
  - 3 選考対象となるのは、日本思想史に関する主題を扱った業績で、日本語もしくは英語で発表されたものに限ります。
  - 4 この賞に、書籍部門と論文部門の2部門を設けます。
  - 5 この賞に応募しようとする会員は、所定の応募用紙に必要事項を記入し、応募する業績6部（コピーも可）、**会員1名の推薦状**とともに、**2025年2月末日**までに、日本思想史学会事務局に郵送して下さい（当日消印有効。宅配便の場合もこれに準ずる）。
  - 6 上記の推薦状はA4判用紙1枚以内とします。
  - 7 応募業績は返却しません。
  - 8 『日本思想史学』第56号に掲載された投稿論文のうち、著者の専門的な研究歴が上記2の規程を満たす者の論文は、自動的に本賞の選考対象となります。
  - 9 選考には会長の主宰の下で総務委員会があたります。
  - 10 2025年度大会の総会において受賞業績を発表し、受賞者に対して会長より賞状を授与します。
- ※ 応募用紙は、日本思想史学会ウェブサイト「奨励賞」(<http://ajih.jp/shoureishou/shoureishou.htm>) ページよりデータをダウンロードの上、ご利用下さい。

## 日本思想史学会奨励賞選考規程 (2020年11月7日最終改訂、評議員会)

- 1 [目的]  
日本思想史学の一層の発展に資することを目的として、この賞を設ける。
- 2 [公募と選考対象とする業績]

当該年度に公募するこの賞の選考対象は、別に定める2年の間に、日本思想史学会の会員によって公刊された著書・論文類で、日本思想史に関する主題を扱った業績とする。

### 3 [応募会員の限定]

前条の会員は、選考対象となる業績を公刊した時点で、学部卒後専門的な研究歴が20年未満である者とする。また当該業績の公刊時点で、日本思想史学会の会員であることを要する。

### 4 [応募手続き]

この賞に応募しようとする会員は、所定の応募用紙に必要事項を記載し、応募する業績6部（コピーも可）、会員1名の推薦状とともに、所定の期日までに学会事務局に提出するものとする。

### 5 [応募手続きの例外]

前条の規定にかかわらず、所定の期間に日本思想史学会の機関誌である『日本思想史学』に掲載された投稿論文に関しては、自動的に選考の対象となるものとする。

### 6 [選考と報告]

会長が主宰し、総務委員をメンバーとする奨励賞選考委員会が選考にあたり、受賞業績を評議員会に報告する。

### 7 [受賞業績の公表と賞の授与]

学会の総会で受賞業績を発表し、受賞者に対し、会長より賞状を授与する。

### 8 [この規程の発効]

この規程は2010年10月17日から発効するものとする。

(2010年10月17日 評議員会決定)

(2017年6月3日改訂)

(2020年11月7日改訂)

## 編集委員会より

『日本思想史学』第57号掲載論文の投稿を、下記の要領にて受け付けます。「投稿規程」に沿わない原稿は、査読の対象外とすることがありますので、規程を熟読のうえご投稿ください。多くの投稿をお待ちしています。

## 『日本思想史学』論文投稿規程（第57号）

### 1 応募資格

本会会員であること。ただし第56号に論文が掲載された者は、応募資格を持たない。また2024年度（2024年10月～2025年9月）分の会費を納めていない者の投稿は受け付けない。

### 2 内容

日本思想史学に関するもの。

### 3 書式・分量

・投稿論文の書式・分量は、A4判を横向きに使用し、縦書きで縦40字×横30行、文字の大きさは10.5ポイントとし、注を含めて、17枚以内とする。下部中央にページ番号を入れること。

・注は文末注とし、本文と同じ書式とすること。脚注機能

を使用する場合は、注の行間が自動的に詰められることがあるので、本文と同じ縦40字×横30行の書式に直すこと（行を詰めたり、ポイントを下げたりしないこと）。

- ・図・表等は、学会誌の判型（A5判）の用紙に印刷して、本文に添付すること（ただし、図・表等に充てる頁数に相当する文字数の分だけ本文の分量を減らすこと。学会誌の書式は、1頁あたり、26字×22行×2段である）。

#### 4 提出物

以下の①～③を電子メールの添付ファイルで提出すること（郵送は不要）。

- ①投稿論文（PDFデータ）。
- ②800字以内の論文要旨（PDFデータ）。
- ③論文および投稿者情報（PDFデータ）。日本語および英語の論文タイトル、氏名およびそのローマ字表記、所属、職名、住所、メールアドレスを記載したもの。論文採用時にはあらためてテキストデータの提出を求める。

#### 5 投稿締切

2025年2月28日17時。

#### 6 送付先

日本思想史学会事務局（ajih.jimukyoku@gmail.com）  
受信後おおむね一両日中に、事務局より受信確認の返信が送られる。3月3日まで待っても返信がない場合は、メール事故の可能性が考えられるので、あらためて事務局に問い合わせること。

#### 7 その他

- ・完成原稿で提出してください。なお紙媒体での投稿原稿は受理も返却もしません。
- ・論文の審査と採否決定には、編集委員会があたります。
- ・本誌に掲載された論文等の著作権は、本会に属します。
- ・なお『日本思想史学』第56号掲載の「『日本思想史学』編集・公開規定」もご参照下さい。

### 大会委員会より

2025年度大会は、2025年11月1日（土）・2日（日）に京都大学吉田キャンパス（京都府京都市）を会場として開催します。ただし、日程や場所については変更の可能性がありますこと、あらかじめご承知おきください。変更がある場合には公式ウェブサイト等で速やかにお知らせいたします。

なお、2025年度大会での発表を申し込む者の資格は次のとおりといたしますので、ご留意ください。

### 〈2025年度大会発表申込資格について〉

2025年度大会において発表の申し込みができる者は、2024年度（2024年10月～2025年9月）分までの会費を完納した会員、または2025年4月末日までに日本思想史学会事務局へ入会申込書を提出し、その後に総務委員会による入会承認を得て、発表申し込みまでに2024年度分の会費を納入した新入会員とする。上記の申請資格を持たない者からの発表申し込みは、一切受け付けない。

### 総会報告

2024年11月9日（土）に開催された2024年度総会において、下記の事項が承認または決定されましたので、お知らせいたします。

#### 【2023年度事業報告】

##### ●総務委員会（会長）

- ・オンラインにて2024年3月21日に総務委員会を、6月22日、10月28日に拡大総務委員会を開催して会務を処理。そのほか、入退会審査などを処理。

##### ●編集委員会（2022-23年度編集委員長）

- ・『日本思想史学』第56号の編集・発行。

##### ●大会委員会（2022-23年度大会委員長）

- ・2024年度大会（筑波大学）の開催準備。

##### ●事務局（事務局長）

- ・ニューズレター第39号・第40号の発行。

#### 【2023年度決算報告・会計監査報告】（事務局長・監事）

- ・下記の資料に基づき、事務局長から決算報告、黒川監事から会計監査報告がなされ、原案どおり承認された。

#### 【2024年度事業計画案審議】（事務局長）

- ・2025年度大会（京都大学）の開催準備、『日本思想史学』第57号の編集・発行、ニューズレター第41号・第42号の発行、第19回日本思想史学会奨励賞の選考・授与、その他本会の目的を達するのに必要な事業。

#### 【2024年度予算案審議】（事務局長）

- ・下記の資料に基づき、事務局長から2024年度予算案の説明があり、原案どおり承認された。

#### 【第18回日本思想史学会奨励賞授賞作品発表】（会長）

- ・会長から、第18回奨励賞受賞者を相澤みのり氏、常瀧琳氏、向静静氏とすることについて、選考経過・選出理由の説明がなされ、賞状が授与された。（別欄参照）

#### 【学会現況】（2024年10月1日時点）

個人会員 493名

団体 4機関

#### 【2023年度決算】

《収入》		
	決算額	予算額
会費収入（注1）	2,896,004	2,810,000
刊行物売上金	60,060	70,000
前年度繰越金	5,510,659	5,510,659
その他（注2）	243	10
計	8,466,966	8,390,669

《支出》		
	決算額	予算額
大会開催費 2024 年度分	400,000	400,000
学会誌発行費 第 56 号	961,180	1,200,000
事務局費	566,673	300,000
HP 管理費	60,000	70,000
「思想史の対話」研究会 開催費	100,000	100,000
委員会経費	0	200,000
幹事手当	600,000	600,000
予備費	—	5,520,669
次年度繰越金	5,779,113	—
計	8,466,966	8,390,669

(注 1) 海外在住会員の会費納入に際しては決済業者の手数料が差し引かれるため端数が生じる。

(注 2) 銀行利息

### 【2024 年度予算案】

《収入》	
会費収入	2,896,000
刊行物売上金	60,000
前年度繰越金	5,779,113
その他	10
計	8,735,123

《支出》	
大会開催費 2024 年度分	400,000
学会誌発行費 第 56 号	1,200,000
事務局費	300,000
HP 管理費	450,000
委員会経費	200,000
若手支援事業経費	100,000
ハラスメント研修経費	66,000
幹事手当	600,000
予備費	5,419,123
計	8,735,123

※ 本学会の会計年度は 10 月 1 日 ~ 9 月 30 日です。

### 新役員紹介

2024 年 8 月に実施された 2024-25 年度評議員選挙およびその後の手続きの結果、次の 30 名の方々が選出されました。

阿部光磨 殷暁星 宇野田尚哉 大川真 大久保健晴  
大谷栄一 長志珠絵 荘部直 桐原健真  
オリオン・クラウタウ 河野有理 昆野伸幸 清水則夫  
曾根原理 高山大毅 田中友香理 富樫進 長尾宗典  
中田喜万 板東洋介 引野亨輔  
ニールス・ファンステーンパール 前田勉 松川雅信

水谷悟 三ツ松誠 望月詩史 本村昌文 賴住光子  
若尾政希

2024 年 11 月 9 日に開催された評議員会において、次のとおり 2024-25 年度の役員が選出されました。

会長 長志珠絵 (再任)  
追加評議員 殷暁星 引野亨輔 松川雅信 望月詩史  
賴住光子  
総務委員 宇野田尚哉 (事務局長) 荘部直 桐原健真  
昆野伸幸 長尾宗典  
大会委員 板東洋介 (委員長) 殷暁星 高山大毅  
ニールス・ファンステーンパール 水谷悟  
望月詩史  
編集委員 河野有理 (委員長) オリオン・クラウタウ  
田中友香理 富樫進 引野亨輔  
監事 黒川伊織 佐々木政文  
幹事 平尾漱太

### 新入会員

#### 《個人会員》

池上 広亮	東京大学大学院(「公論」を巡る日本近代)
小林 優里	東京大学史料編纂所(近世後期の国学と「考証」)
鈴木 健多郎	國學院大學研究開発推進機構(近世遠江地域における国学の展開)
高橋 祯雄	東北大学高度教養教育・学生支援機構(日本近世思想史・大学史)
田渕 舜也	慶應義塾大学大学院(新カント学派と南原繁)
中務 章子	岡山大学大学院(宗教学者岸本英夫の死生観)
服部 直美	東京大学大学院(日本宗教思想のキリスト教受容)
ハムザ イサム	東京国際大学(近代日本への新国家構想)
藤野 真舉	茨城キリスト教大学(明治期の哲学・倫理思想の展開)
洪 信慧	東京大学大学院(19世紀東アジア思想史)
真辺 美佐	立正大学(日本の民主化過程の思想史的研究)

### 受贈図書

阿部泰郎・楠淳證編『解脱房貞慶の世界:『觀世音菩薩感應抄』  
を読み解く』法藏館  
神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』57巻1~  
9号  
高麗大学校文科大学朴煥玖写真集刊行委員会編, 金津日出美  
訳『今に伝える韓国の宗家祭祀:朴煥玖写真集』文理閣  
小島康敬校注『乳井貢:志学幼弁』北海道大学出版会  
田尻祐一郎『徳川思想史の研究:情理と他者性』ペリカン社

田世民『儒学をいかに生きるか：近世日本儒者の経書解釈と思想実践』臺大出版中心

東方学会『東方學會報』No.126・127

中村安宏『佐藤一斎とその時代』ペリカン社

朴海仙『植民地朝鮮の予言と民衆宗教』法藏館

品治佑吉『人生と闘争：清水幾太郎の社会学』白水社

三原容子『農とアナキズム：三原容子論集』アナキズム文献

センター

山際明利『張載思想研究：宋明理學の中の「太虛」説』北海道大学出版会

山本正身『江戸教育思想史』ミネルヴァ書房

吉田一彦『神仏融合史の研究』名古屋大学出版会

（前号発行以降寄贈分、発行年はすべて2024年）

### 会費納入のお願い

2024年12月26日に請求書を郵送しました。会費の納入をお願いします。払込用紙が見当たらない場合は、下記の口座に払込ください。払込料金はご負担いただいております。

ゆうちょ銀行

振替口座記号番号：00920-3-196013

加入者名：日本思想史学会

また、他の金融機関からのお振込に際しては、下記の情報をご参照ください。

金融機関コード：9900（ゆうちょ銀行）

店名：○九九店（ゼロキュウキュウ店）

口座番号：0196013

加入者名：日本思想史学会

※当会の会計年度は、10月1日～9月30日です。したがって、2024年度は2024年10月1日～2025年9月30日となります。ご承知おきください。

※3年をこえて会費を滞納された方は、会則第4条に基づき、総務委員会の議をへて退会扱いとなります。

※2020年度請求分より年会費に一部変更があります。

常勤職にある会員 7,000円

常勤職にない会員 5,000円

海外在住会員 5,000円

団体会員 3,500円

となっております。ご注意ください。

※ゆうちょ銀行は、2022年1月17日より一部料金を値上げしました。窓口でもATMでも、会費の払込を現金支払いにしますと加算料金110円がかかります。ご注意ください。通帳またはキャッシュカードを利用して、ご自分のゆうちょ口座から支払う場合は、料金に変更ありません。詳しく

は郵便局・ゆうちょ銀行までお尋ねください。

### 事務局より

①連絡先の変更、学会へのお問い合わせ等は、学会事務局宛に電子メールまたは郵便（葉書・封書等）でご連絡ください。電話・FAXは受け付けておりません。

②当学会では会員メーリングリストを運用しております。下記の方々は、ご確認ご検討のほど、よろしくお願ひ致します。

（1）名簿にメールアドレスを登録されていない方

・メール受信をご希望の方は、下記の事務局アドレスまでお知らせください。

・電子メールやインターネットを使用されない方は、従来どおりの郵送希望を受け付けます。その場合、下記の事務局住所まで、郵送希望の旨、郵便（葉書・封書等）でお知らせください。

（2）名簿にメールアドレスを登録済みだが、受信できていない方（受信した覚えがない方）

・「迷惑メールボックス」に入ってしまっている恐れがあります。

・受信自体を拒否されている場合もあります。いま一度、設定をご確認ください。必要に応じて再登録を行いますので、下記の事務局アドレスまでお知らせください。

（3）現在受信しているメールアドレスをあまり利用していない方

・ご希望に応じて他のメールアドレスの再登録を行いますので、下記の事務局アドレスまでお知らせください。

\*会員メーリングリストへのアドレス登録、更新、削除は、すべて事務局が行います。メールアドレスに変更が生じた際は、新しいアドレスで再登録いたしますので、ご一報ください。

③入会手続は初年度の会費の納入をもって完了します。入会審査が終わったのちに、速やかに初年度分の会費を納付してくださいますようお願いします。

④2024年11月5日、アカデミック・ハラスメントの学会FDとして、NPOアカデミック・ハラスメントをなくすネットワーク（NAAH）の御輿久美子氏にお話いただきました。録画のURLは以下のとおりです。当面、公開します。なお、視聴は学会員の方に限定してください。

<https://drive.google.com/drive/folders/1O-w2ykzhIJ6aUV5EEEnExxqDguiMJ82Oh>

日本思想史学会 News Letter No.41 (冬季号) (通巻41号)

2025年2月12日発行 発行: 日本思想史学会

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1・5

大阪大学大学院 人文学研究科

宇野田 尚哉 研究室内

E-Mail: [ajih.jimukyoku@gmail.com](mailto:ajih.jimukyoku@gmail.com)

(幹事 平尾漱太)

WEB SITE: <http://ajih.jp/>

Association for Japanese Intellectual History